



小説の未来 (12)

基礎概念

春日信彦

今まで小説を書くうえでの創作概念についていくつか述べてきましたが、今回は、作品に共通する基礎概念と作風の特徴について述べてみたいと思います。

未来の読者

一般的に、小説は読者のために書くわけですから、ほとんどの作品は読者が楽しめることができる範囲を逸脱しないように仕上げられています。私も読者のことを考慮して書いてはいますが、自作品は市販されている作品と違って、いくつかのこだわりが組み込まれています。

私の作品をお読みになったことがある読者の方は、お気づきと思いますが、作品と書かれた時期が少なからずリンクしていることです。というのは、作品を読んでいただく時期を現在だけでなく未来にも想定しているからです。

言い換えると、現代の読者だけでなく、10年後、20年後、30年後の読者を想定して書いているのです。たとえば、一つの例として、登場人物の名前に人気芸能人や政治家の名前を使ったりしています。30年後の読者に、その名前をヒントにその時代の社会背景を連想していただきたいのです。

いくつかの作品においては、精神や社会に関する具体的な事象をもとにドラマ化していますが、あくまでも事実についての考察を行っているのではなく、これらの事象を参考にして未来の人間の在り方を考察しているのです。今後、常識の変化に伴い読者の認識は変化すると予測し、そのことも踏まえ作品を構成しています。

私の作品はノンフィクションものではないので、可能な限り事実は書かないようにしています。でも、現実起きた事件を参考にした作品もいくつかはあります。未来の読者には、平成時代に書かれた作品から、当時の作者の未来観を感じ取っていただければと思っています。

おそらく生きてはいないと思われる30年後の社会を想像することは難しいのですが、人の心はあまり変わっていないような気がします。恋愛小説の源氏物語が、現代の人に感動を与えていることを考えると、その時代の作品は、未来の作品にもなりうるのではないのでしょうか。以下に述べる基礎概念は、未来の読者にも十分役立つものと思っています。

基礎概念

小説は読者に満足していただければ、成功作品と思われませんが、作品には作者なりの思いも詰め込まれています。私の場合、すでに電子書籍として短編小説73作品を公開しています。それらの作品にはそれぞれの具体的なテーマがありますが、また、すべての作品には理解されにくい共通する基礎概念も根底にあるのです。この基礎概念こそ自作の最大の特徴なのです。

その基礎概念を理論的に説明できればそれに越したことはないと思うのですが、それが難しいのです。だから、どうにかこうにか、小説で表現しているというわけです。果たして、自分の基礎概念をどれほど読者に伝えられたらと思うと自信はありません。

簡単に言えば、力学においては、作用と反作用が同時に起きています。積分においては、解析と集積が同時に起きています。細胞においては、がん細胞と正常細胞が同時に生まれています。

このように相反する運動が同時に起きているのですが、我々は、一定の条件を設定して、事象を認識しています。たとえば、 $Y=X$ においては無限の存在を認識しますが、 -1 から $+1$ までの条件を設定すれば、有限の存在を認識できます。

私の基礎概念は、理論的にうまく説明できませんが、自分なりの表現として、短編を書き続けています。なぜ、短編にするかと言いますと、確かに、長編にすれば読者にとっては楽しめるドラマになるのですが、こうなってしまうと、どうしても読者は娯楽に酔ってしまうのです。だから、あえて長編をさけているのです。

小説は娯楽なのだからそれでいいじゃないかとおっしゃる読者は多いと思われませんが、私は、表現したい基礎概念を優先したく、短編にまとめ上げています。でも、シリーズものにしていきますので、それらをリンクさせれば、長編として読むこともできます。

言語の特性

基礎概念を理論的にうまく表現しにくいのであれば、映像化してみてもどうか？と言われる方もいらっしゃるでしょう。小説が映像化される例は、多々あります。言語を非言語化する手法は、小説をより娯楽化するのには適していると思われます。

松本清張の「砂の器」は、映画、TVで見られた方のほうが、小説を読まれた方より多いのではないのでしょうか。確かに、映像化されるとドラマの内容はわかりやすく、主人公を通じて楽しめるのですが、果たして、人気俳優をクローズアップしたドラマで、作者の訴えたい気持ちがうまく表現されているのだろうかと考えると疑問が残るのです。

やはり、言語で訴えられるものと映像で訴えられるものには、違いがあります。決して、小説にとって映像化がマイナス的なものと言っているわけではありません。いったん、映像化されたものは、言語からなる小説とは別物と考えた方がいいのではないかと思うのです。

概念の熟成

私の作品は基礎概念の表現と述べてきましたが、この基礎概念を作品の創造に使いこなせるまでに、かれこれ約40年という月日を要しました。我ながら、基礎概念の熟成にかなりの時間を要したものだと思いますが、頭脳の歴史と思い納得しています。

中学校1年生のころ、下校途中で両側のガードのない橋の上を歩いていたときに、ふと頭に浮かんだ“物質とはなにか？”と疑問に思ったことが、基礎概念の発端になったのではないかと思います。

すべての物質に共通するものがあるのではないか？いかなる物質も運動しているのではないか？物質もエネルギー形態の一つではないか？非物質はあるのだろうか？宇宙は物質なのか？宇宙の外部は存在するのか？宇宙は膨張しているのか？なぜ、生と死は存在するのか？そのような疑問が脳内を駆け巡り、それらとのかかわりとともに基礎概念が熟成されていったような気がします。

小説を書き始めたのは、高校生からでしたが、基礎概念を踏まえた作品を書けるようになったのは、50歳を過ぎてからのように思います。基礎概念の長い熟成が、現在の作品を作り上げていると思えてなりません。

文学界の歴史において、才能ある作家が素晴らしい文学作品を世に送り出してきました。幸いにも私は彼らの作品を参考にさせていただきましたが、私の作品は文学作品の域には達していないでしょう。それでも、これから小説家を志す若者に、多少なりとも私の基礎概念が参考になればと思っています。

基礎概念の応用

そんなに基礎概念にこだわるのであれば、小説以外にも応用できるのではないかとおっしゃる方もいらっしゃるでしょう。あくまでも個人的な考えですが、私の基礎概念は、芸術、科学、スポーツ、経済、政治などのあらゆる分野においても応用できるものと考えています。特に天然資源である脳の有効利用に役立つと確信しています。

今後も、人間の脳の考察において、個人と社会の両側面から基礎概念の応用を試みていきたいと思っています。時々、擬人化された動物が登場しますが、これは、動物の脳と人間の脳の共通する点や相違する点を考察しています。

突然の死というものが存在する限り、いつまで小説を書き続けられるかわかりませんが、自作品は、物質である人間が、将来にわたり、生と死という存在形態の変化をどのように考えていくのかを考察するものでもあります。

まったくのんきな話ですが、将来、この基礎概念が役に立ったと言っただけの読者が現れることを願っています。今後も知能と健康が続く限り、のんびりと小説を書き続けることで、基礎概念を表現していきたいと思っています。

私の話は分かりにくかったと思いますが、少しでも参考にしていただけたら幸いです。また、今まで自作品を読んでいただいた読者の方に心より感謝申し上げます。